トップシークレット

私立赤星学園
剣道部

風薙 真人
SHINTO KAZANAGI

目次

トップ・シークレット・・・・・・・・・・・・・・・３

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７６

お知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７８

イラストレーション／如月　由維

――――――　序章　――――――

「宏(ヒロ)、準備できたぞ」
『よし。今、信号を青に変えた。射程距離到達まで２３秒だ』
「了解」
　沈黙
『１０秒』
「ターゲット、確認」
『３秒』
「…」
『射程到達』
　パシュッ。
「命中確認。頭部だ」
『よし。すぐに引き上げろ、尚人(なおと)。裏手にバイクを停めてある』
「ＯＫ。サンキュ」
手早く荷物をまとめ、肩に担ぐ。音を立てずに階段を降りて行く。
（今回も、無事に成功、と）
裏口を出ると、パートナーの言った通りにバイクが停めてあった。バッグをシートトランクに入れ、フルフェイスのヘルメットをかぶってバイクにまたがる。
　エンジンをかけて、１度だけ自分の右手を見た。
（すっかり、クセになっちまったな）
その右手でアクセルをひねり、発進する。
　４７秒前まで、右手に握られていたもの。
　ライフル銃。

――――――　一章　――――――

　千葉県の北東部、東京ディズニーランドにもほど近い場所に、その建物はある。
　私立赤星学園、通称・赤学(あかがく)。中高一貫・六年制教育を掲げるその学校は、中等部６５２名、高等部９６３名の生徒数を誇るマンモス校である。広大な敷地の東側が中等部校舎、西側が高等部校舎で、中等部には本館と新館が、高等部には東校舎と西校舎がそれぞれある。
　高等部には、運動系・文化系合わせて３２もの部活・サークルがある。その部活のなかで、野球部に次いで部費の高い部活、それが報道部である。
　その報道部の部室、通称プレスセンター。クリスマスも間近に迫った放課後。部長である瀬戸陽(せとあきら)は、今朝キオスクで購入した新聞に目を通していた。４回目の読み返しである。
「ついに千葉にも現れたか…」
　緊迫するアフガニスタン情勢にトップを奪われてはいるが、その記事の脇に、トップニュースと並ぶほど大きなスペースを取っている話題。見出しは「ライフル殺人、今度は千葉」
「首都圏初のターゲットが、よりにもよって千葉とはね」
「ショックだよねえ。東京でも神奈川でもなく、千葉だもんねえ」
陽のつぶやきに、同じ報道部員の葉山奈央(はやまなお)が相槌を打つ。
　最近、全国各地で犯人不明の殺人事件が多発している。犯行の手口は、種類の違いはあるものの、一様に銃器によるものだった。
　最初の事件は大阪。大手製造業の下請け企業の幹部が、

残業から帰宅しようとしたところを殺害された。当初は通常の殺人事件として捜査がすすめられたが、いくら捜査をしても犯人につながる手がかりは毛ほども出てこなかった。
　大阪の事件が迷宮入りしようかと思われたとき、今度は福岡・静岡・仙台で同時に殺人事件が起こる。しかし、どの事件も犯人につながる有力な手がかりは、やはりなかった。
　そうこうしているうちに、事件の波は函館・金沢・長崎・長野に広がり、今回はじめて首都圏が狙われたのだ。いずれの事件も、手がかりはない。
「この寒い時期に、よくやるよねえ」
「お姉ちゃん、それはあんまり関係ないんじゃない？」
奈央の妹である牡丹(ぼたん)が意見する。彼女も報道部員だ。
「でも、函館なんてもう雪降ってるよ？遺体は雪の中から出て来たって言うし」
「しかしなあ、どうしてこう幹部レベルの人間ばかり狙うんだろうな」
「最初は、そいつらに恨みでもあるとか、そいつがいると不利益を被(こうむ)るとか、そういった連中の仕業かと思ったけどね。でも、殺された人間の間には交遊関係が全くなかったらしいし、同一人物の犯行とはとても思えないからねえ」
「でも、手口は同じなんですよね。銃で頭を」
「ああ。全員が一発でしとめられてる。相当に腕が立つんだろうな」
「プロってことですか？」
「ありうる」
「ってゆーか、それ意外に考えられないんでしょ？だったらそういった組織を張っとけば早いのに」

「それができたらとっくにやってる、ってことさ。そんな組織、どこにあるんだか分かったもんじゃない」
「大手を振って『殺人のプロ養成』なんてやってることろなんて、ないですよね」
「当然だろ。それどころか、事務所みたいなのが存在するのかすら疑問だし」
そのとき、部室のドアが開いて女子が一人入ってきた。
２年の藤本鈴音（ふじもと すずね）だ。
「こんにちはー」
「おー、リンちゃん。ちーす」
「何の話してるんですか？」
「昨日のライフル殺人です。瀬戸さんが新聞買ってきてて」
「あー、私も今朝ニュースで見たよ。嫌だよねえ。ここのすぐ近くなんでしょ？」
「そうなんだ。高層ビルが林立してる真っ只中の道路上。車を運転中に」
「車？窓開けてたの？」
「フロントガラスもぶち抜いたらしいですよ。徹甲弾ですよね、きっと」
「銃自体の威力もかなりのもんだろうね。フロントガラスと貫通させて頭を撃つなんて、普通の銃じゃ無理だろ」
本当に物騒な世の中になったな、と陽は思う。サイバーテロ[※1]のほうが興味はあるのだが。
「日本が安全だなんて、もう言ってられませんよね」
牡丹の科白（せりふ）に、誰もがうなずく。「日本安全神話」は、既に崩壊しているのだ。いつどこで危険が降りかかるか

※1 サイバーテロ…電子メールやインターネット上のホームページを利用した犯罪。コンピューターウイルスが最も有名。

わからない。
「大地さんが、これを記事にする、なんて言い出したら、牡丹ちゃん、覚悟したほうがいいわね」
「さすがに殺人事件にまでは首を突っ込まないと思いますけど…」
「大地はなんでもやるからねえ。首を突っ込まないとも言い切れないね」
「やだ、お姉ちゃん。ぞっとするからやめてよ」
「何かの拍子に死体見ちゃったりして」
「やめてったらー」
話の内容的に笑えないのだが、とことん仲のいい姉妹だ。この２人がこうして痴話げんかをしていても、部室の中はあたたかい。
（この雰囲気は大事にしたいよな）
陽は思った。

――――――　二章　――――――

　通い慣れた通学路。いつもと変わらない静かな通り。街灯はついているが、この場を包み込む闇にはかなわない。
（そろそろ電球取り換えたらいいのに）
点々と配置された街灯は、通りを黄色く、ぼんやりと照らしていた。
（物理と数学のレポート、明後日までだったっけ）
じゃあ今日は物理をやろうと決め、鈴音はいつもの足取りで歩を進める。
　ふと空を見上げる。都会にしては珍しく、星が輝いている。先月のしし座流星群は、この近所でも観測されたらしい。
　と、視界の隅に異常を見つけた。黄色く光る街灯でも、白く瞬く星でもない。
（ちょっと、え？もしかして…）
―――レーザーサイト？
　なぜその言葉が浮かんだかはわからなかったが、反射的に反対方向にあるビルを見る。窓のひとつがおかしい。何かが動いている。
（人…なの？）
動く何かに目を奪われていると、その何かが顔を出した。星の明かりでかすかに顔が見えた。金髪らしきものが光っている。
（え？）
鈴音がそう思ったとき、ビルの中の人物は鈴音に気づいたのか急いで身を隠した。数十秒後、バイクの疾走音が聞こえてきた。
（うそ…）

見間違いか。暗くてよく見えなかったが、それでも鈴音はあの顔の人物をよく知っていた。いや、あの顔に似ている人物を。
　まさか、と、でも、をくりかえし、認めたくはない現実を受けとめる。
（真下…くん…？）

「セット完了。いつでもいけるぜ」
『よし。目標は４分３７秒後に現れる。それまで待機だ』
「了解」
　尚人は壁に寄りかかって座り込んだ。傍らには、ライフル銃がセットされている。
（これで何人目だ？）
もう数えるのも面倒くさい。首を振って、思考を切りかえる。
（集中、しねえと）
『３分だ』
尚人は、窓から顔を乗り出してみた。空には星が輝いている。そして、眼下には街灯のぼやけた光。と、何かの影。
（人か？）
少し体を動かして、光がそれを照らすようにしてみる。
（―――藤本！？）
「マズイ、宏！俺のクラスのやつが下にいる！」
『な…！？クソッ！尚、引き上げだ。作戦を練り直す！』
「わかった」
すばやく銃を片付け、バッグを背負って階段を降りる。
もちろん、足音はたてない。

（ちくしょー！顔見られたかも！）
バイクにまたがり、急いで発進させる。
「宏、スマン。俺がもっと周りを気にしてりゃよかった」
『いや、事前調査で調べきれなかった俺のミスだ。とにかく早く帰って来い』
「オウ…」
住んでいるマンションには、ものの十数分で到着する。
バイザーの隙間から入り込む風が、妙に痛く感じられた。

「では、１６０ページの問６、それから問題の３、４、５をやってください」
数学教師の上田の声で、生徒たちの手が一斉に動き始める。目線は、一様にノートに向かっている。が、鈴音だけは全く違う方向を向いていた。
（似てる、よね…）
　鈴音の目には、ひとりの男子がうつっている。真下尚人。おおらかな性格で、クラスの人気者だ。休み時間にはたくさんの人だかりができる。しかし、授業中の表情は真剣そのもので、余計な私語など一切しないのだ。
「藤本、何を見てるんだ？」
鈴音が我に返って降り向くと、上田がすぐ隣に立っていた。
「俺の授業はそんなに退屈か？ん？」
「あっ…いえ、そんなことないです。すいません」
鈴音のノートは、昨日の部分で終わっている。今日はまだ何も書いていない。書こうと思っても、尚人が気になって書けないのだ。
　昨日の帰り道、暗いビルの窓に見えた顔。尚人にそっ

くりだった。そのせいで、鈴音は朝から尚人に釘づけである。
（考えても仕方ないかもしれないけど）
やっぱり気になるのよね、と胸中でつぶやく。
（瀬戸さんに話してみようかな）
そう結論付けて、ようやくノートにシャープペンを走らせる。解いてみると、案外簡単なものばかりだった。
（微積分は得意だしね）
そのかわり、他はてんでダメだけど。
　全ての問題を解き終えたとき、授業終了のチャイムがなった。

　陽は悩んでいた。いいアイディアが思いつかない。
（どうやって撮影するかなあ…）
　クリスマスの恒例行事、中・高等部合同の大パーティーで、ステージ上の出演者たちを下から撮影できないか、という要請が生徒会から出されたのだ。学校説明会等で使う紹介ビデオに使うためだ。
（ステージ下は、あんまり広くはとれないしなあ）
ステージからオーディエンスまでの間隔を、あまり広くするわけにもいかない。どの程度ならちょうどいいか。
（実際にやってみるしかないか）
放課後、みんなに協力してもらおう。
「瀬戸ォ、今は何の時間だ？休み時間か？」
教師の中野の声がした。陽の表情が凍りつく。
「物理…です…」
「そうだな。じゃあ、今お前の机に広がってるのはなんだ？」

「…仕事関係？」
「なぜ俺に訊(き)く」
「仕事じゃないといえば嘘になるけど、世間一般に言う仕事でもないんで」
「そりゃまあ、確かにな…」
「（１）は限界振動数[※2]ですね。（２）は ｈ／λ(ラムダぶんのエイチ)」
「ん？ああ、そうだな。なんだ、ちゃんとやってるんじゃないか」
「基本問題でしょ。読めば分かりますよ」
「まあな。じゃあ５６２の（１）はどうなる？」
「計算しないと分かりません」
「じゃ、計算して答えを出せ」
「わかりました」
陽の返事を聞いて、中野は去っていった。陽は、ふぅ、と嘆息する。
（一応、結論は出たしな）
計算を始める。通信産業を志す者として、原子物理学はおろそかにできない。
「瀬戸、できたか？」
「あ、はい。３．０×１０$^{-6}$mです」
「正解だ。それを踏まえて、プランク定数[※3] はどうなる？」
「ええっと……６．６３×１０$^{-34}$ですか？」
「その通りだ。単位は？」

[※2] 限界振動数…[原子]光電効果（金属極板に光を当てると、電子が飛び出す現象）が起こるための最低振動数。
[※3] プランク定数…原子物理学に用いられる比例定数。

「Ｊ・ｓ[※4]」
「よし、パーフェクトだ」
陽はふたたび嘆息する。必要以上に頭を使った。
（疲れるな、まったく）
授業終了のチャイムがなった。

「そういうわけで、協力よろしくな」
放課後の部室。ステージとオーディエンスの適正距離を測るための協力を部員たちに頼み、陽は印刷し終わった会場図を手に取った。
「じゃ、行こう」
部室を出る。鍵はかけない。
（ってゆーか、この部屋の鍵なんてあるのか？）
陽はまだ見たことがない。３年のこの時期で、しかも部長なのに見たことがないということは。
（…ないのか？存在しないのか？）
なんと無用心な。
「瀬戸さん」
唐突に声をかけられ、陽は飛びあがりそうになる。
「ど、どうした？リンちゃん」
「あとで、ちょっと話があるんですけど」
「今じゃマズイの？」
「ここでは、さすがに…」
「そっか…。じゃ、これが終わったらゆっくり聞くよ」
「はい。お願いします」

※4 Ｊ・ｓ…ジュール・セカンド。エネルギー量と時間の積。プランク定数の単位は物理法則によるものではなく、次元方程式によって導き出されたもの。

陽と鈴音は並んで歩き出した。視界の隅に、頬をふくれさせた牡丹が見えた気がしないでもないが。
　体育館に到着すると、カメラマンの山本祐平（やまもと ゆうへい）が大型のカメラを担ぎ、ステージ下のスタンバイした。ステージの上には奈央が上がり、パフォーマンスポジションにつく。そのほかの部員たちはオーディエンス役となり、祐平から数歩下がったところにずらりと並んだ。
（広いな、ウチの体育館）
約３０人が横一列に並んでちょうどいい広さ。なんせバスケットコートが４面もとれるのだ。私立校ならではの大設備である。
「じゃあ祐平、撮影しやすい位置で動いてくれ」
「了解ッス」
祐平が２、３歩あとずさりし、横に動き始めた。
「みんなは、祐平が邪魔にならずに奈央が見えるような位置までさがってくれ！！」
大声で叫ぶ。そうしないと、向こう側まで聞こえない。
「陽さん、だいたいこの辺ですね。これより前だと、逆光で撮影できない」
「ＯＫ」
陽はすぐに距離を測り、会場図に書き込む。
「みんなはどうだ！そんなもんか！？」
何人かの部員がうなずいた。陽はそこへ走り、見栄えを確認する。いくつかのポイントで確認を済ませ、会場図のメモを見てみると、
（なるほど。ラウンド[※5]させるのか）
中央部が最も遠く、端に行くほど近くなっていた。
（これなら問題ないな）

[※5] ラウンド…曲げること。Ｒ（アール）ともいう。

実際に試したのだ。実測に勝る理論はない。
「よし！ＯＫだ！ありがとう！」
三度(みたび)大声を張りあげて、部員たちを撤収させる。会場図に、カメラの移動ラインとオーディエンスの前端ラインを書き込んで、陽も部室に向かう。そこで、ふと思い出した。
（リンちゃんが俺に話なんて、珍しいな）
鈴音は大抵、奈央に相談を持ち掛ける。陽もそれは知っていた。
（よっぽど重要なことなんだろうか）
考えなくても、聞けば分かるか。
　陽はそう考えて、歩を早めた。

「犯人を知ってるかもしれない？」
鈴音の話の内容は、驚くべきものだった。昨日の夜、一連のライフル殺人と関連があると思われる現場に遭遇し、しかもその犯人が鈴音のクラスにいるかもしれないというのだ。
（でもなあ）
「信じられないよ、そんな話」
「それはそうだと思います。というか、普通はそうでしょう」
でも自分は見たのだ、星明りに照らされた彼の顔と、金色に輝いた髪。
（そっくりなんだもん）
自分だって信じたくはない。自分のすぐ近くに殺人犯がいるなどと思いたくはないのだ。
「瀬戸さん」

鈴音は、意を決して言い放った。
「私に、この事件を追わせてください」
陽は絶句した。まさか、こんなことを言うなんて。
「どうしても気になるんです。自分の手ではっきりさせたいんです」
「危険すぎる。部長として、許可できるはずないじゃないか」
「危険は承知のうえです。でも、はっきりさせないでビクビクしてるよりは、危険でもはっきりさせたいんです」
鈴音の目は、本気の目だ。誰になんと言われようと、私はこの目で確かめたい。行きつく先が良きにしろ悪きにしろ、はっきりしていたほうが覚悟もできる。
「リンちゃん…」
陽の口調は重かった。許可したら最後、鈴音に何かあったら、その責任は全て陽のそれとなる。果たしてそれだけのものを背負えるのか。だが———
（苦渋の決断っていうのは、このことを言うんだな）
自分も、覚悟を決めるとしようか。
「とめたって、行くんだろう？」
「もちろん、そのつもりです」
「なら、俺の答えはひとつしか用意されてないじゃないか」
「じゃあ…」
陽は、ひとつうなずいて言った。
「俺が責任をとらないわけにはいかないからね」
「ありがとうございます」
鈴音は深々と頭を下げた。そこに込められたのは、感謝と覚悟の念。
（絶対につきとめてやる）
どんな結果になったって、かまうものか。確かめること

が重要なのだ。
（待ってなさいよ、真下尚人！）
鈴音は、拳を握り締めた。

「はあああああ…」
めったにないほど、大きなため息をつく。肩に、大きな荷物を担がされたような重みを感じていた。
　ものすごい数の文庫本が整然と並べられた本棚。その脇に山積みにされた通信関係の書籍類。机には、姉から譲ってもらった受験教材が並んでいる。ここは、陽の自室である。
　ベッドに腰掛けて本を読みながら、陽は今日の放課後の出来事を思い返していた。
（後悔してもしょうがないんだけどさあ）
なんであんなことになっちゃったかなあ。
（万が一のことでもあったらどうするよ）
と考えて、陽ははっとする。何を不謹慎なことを考えているのだ、自分は。
　鈴音を信じたから、だから許可したのだろう？自分も、覚悟は出来ているのだろう？
　そう自分に言い聞かせ、嫌な思いを拭い去る。
「陽、ご飯できたわよ」
「はーい。今いく」
文庫本を放（ほう）って、立ちあがる。窓から見える星空を見上げた。
（ホントに、きれいですこと）
自室を出た。

「ふう」
机に広げた分厚い本から目を離し、眼鏡をはずしてまぶたを抑える。
「う〜ん…」
むずかしい。こんなの、理解できない。
（頭がパンクしちゃうよ）
やっぱりやめときゃよかった。重くて難しい本なんて、最低の本だ。鈴音は心底(しんそこ)そう思った。
　学校の図書館で借りてきた刑法書。今まで小一時間ほど黙々と読みふけっていたが、鈴音にはさっぱり理解できなかった。それでも半分ほどまで読み進めたのだ。最後まで読まないと。最後まで。最後まで。
　…最後まで？
　鈴音は、はたと気づいた。最後まで読む必要なんて、あるのだろうか。
（よく考えたら、窃盗とか関係ないじゃん）
「最悪ぅ…」
なんで気づかなかったんだろう。自分は殺人事件に首を突っ込むんだから、そこだけ読めばいいではないか。しかも、まだ殺人に関する項目は読んでいない気がする。
（私の１時間を返して…）
１時間あれば、数学の問題集を５ページは進められただろうに。
　うんざりしながら目を開けると、正面の窓から空が見えた。星はそんなに多くない。
（星の明かりって、あったかいよねえ）
この星たちに免じて、もう少しがんばってみようかな。
　鈴音はすたたび、分厚い本に向かった。

「それで―――エイチ―――に等し―――」
何しゃべってんの？
「したがっ―――エックス―――に等し―――」
うとうと。
「で、次―――で割って―――エムが―――となる。藤本！！」
「は、はい！！？？」
あまりに突然呼ばれて（いや、起こされて）、鈴音の目は点になっている。
「今の例題、理解したのか？」
「え、あ、えーと、エイチがエックスに等しくどーのこーのって…」
「なんだそりゃ。何もわかってないじゃないか」
「す、すいません…」
「しっかり理解しろ。他の者は、問２６と２７をやる」
今日は朝からこんな状態だ。１時間目の英語も、２時間目の化学も、３時間目の現代文も、まったく理解できていない。
（眠いんだよぉ…）
自業自得なのは分かっているのだが。
　結局、昨夜は３時くらいまで刑法書を読んでいた。殺人に関する項目は意外と多く、殺人未遂まで調べると、なんと４ページに及んでいた。もちろん、字は相当に細かい。
（あの本、難しすぎる）
頭をかいていると、ふと視界の隅に人影がうつった。こちらを向いて、クスクス笑っている。よく知った顔。混

じりっけのない金髪。
（あたしがこんなに眠いのはねえ…）
あんたのせいなのよ。
（真下！！）
こちらの視線に気づいたのか、尚人は机に向き直って問題を解き始めた。鈴音も、ノートにシャーペンを走らせる。が、案の定。
（…わかんない）
例題見直さないと。と、と、と…
（あああっ！黒板消さないでええ！！）
そんな願いが通じるはずもなく。
（あーあ…）
がっくりとうなだれる。視界の片隅に、またもや。
（もう、勝手に笑ってなさいよ）
尚人が無邪気な笑顔を見せていた。

「真下くん！」
たいして聞きなれてはいないが、誰のものかはすぐに分かる声で自分の名を呼ばれ、尚人は素直に振り向いた。その先にはショートカットの少女がいる。他に特徴らしい特徴はない。
「あー？」
「あー？じゃないわよ！さっきから私のほう見ては、クスクスクスクス笑って！一体何がおかしいのよ！？」
それくらい気づけよ、と言いかけて、尚人はやめた。あとの仕返しがこわい。
「いつものあんたじゃねえからさ」
「どういう意味よ！」

「ホゲーッとしてる」
「うるっさいわねっ！！」
パアーン！！
　尚人の机上(きじょう)で甲高(かんだか)い音がした。鈴音の平手によって、机の上にあった未開封のコロッケパンの袋が破裂したのだ。中身の状態は、言うまでもない。
「ああっ！なんてことしやがる！俺の昼メシ返せ！！」
「あんたが悪いんでしょ！！食べたいなら新しく買ったら！？」
「ざっけんな！金欠の学生に何言ってやがる！！」
「お金がないのもあんたが悪いんじゃない！私は何も悪くないわ！」
「そういうこと言ってんじゃねえだろうがっ！！」
教室のど真ん中で突如始まった鈴音と尚人の口論に、またたく間にギャラリーが押し寄せる。その中には、他にクラスの人間もちらほら。
「お前がツブしたんだろーが！お前が返すのが当たり前だろ！！」
「女心を傷つけたあんたが悪いのよ！自分の言動を悔いることね！！」
「俺はお前の質問に答えただけだろうが！！」
「その答え方が問題なのよ！まったく、女心ってのがわかってないわね！」
「ンなもんわかってたまるか！！」
「あーそうですか！じゃあ一生結婚なんてできないわね！！」
「何年先の話してやがる！！」
「一生できないって言ったでしょ！何年先もなにもないわよ！！」
「ンなこと言ったら、お前だってできないじゃねえの

か！？そんな性格で、俺だったらこっちから願い下げだね！！」
「別にあんたなんかに期待してないわよ！！」
「だから願い下げだって言ってんだろ！！」
そこで、とんでもない邪魔者が入った。昼休み終了のチャイムだ。
「あーもう！あんたのせいでお昼ご飯食べそこなっちゃったじゃない！！」
「それはこっちのセリフだ！おまけにパン代まで無駄にしやがって！！」
「ふんっ！！」
「けっ！！」
尚人は自分の鞄を乱暴に引っつかみ、教室を出ていった。
鈴音も、自分の机から政経の教科書を取り出し、鞄を肩にかけた。
（あ、そういえば）
口論に夢中で肝心なことを忘れていた。鞄から時間割を取り出し、確認する。次に会うのは帰りのホームルームか。
（そのときに頼めばいっか）
鞄を担ぎなおし、教室を出た。

（…おかしい）
俺はいつも１人で帰ってなかったか？
（っつーか、そうだよな）
なのに、どうして。
（こんなヤツが一緒にいるんだ？）
しかも、昼休みにケンカしたばかりだというのに。

（笑ってやがるしよお…）
「何怒ってんのよ？」
お前が知らねえワケねえだろ。
「もしかして、昼休みのこと？」
他に何があるっつーんだ。
「あのことだったら、本当に悪かったと思ってるって」
信用するか。
「なんなら弁償しようか？」
今さら遅(おせ)えよ。
「じゃあどうしたらいい？」
っつーか、ついてくんなよ。
「でもとりあえず、家の中は見せてね」
断る。
「返事なしってことはＯＫだね。やったァ！」
「勝手に決めんな！！」
「え？いいんじゃないの？」
「よかねえよ！」
「何か隠し事でもあるわけ？」
「いや、そんなもんねえけど…」
「なら、いいじゃない」
「そういう問題じゃねえだろ！」
「決まりね！早く行こ！」
「おいコラ！待ちやがれ！」
（ったく…）
午後の２時間のうちに、何があったというのか。
「待てってんだよ！俺はまだ許可してねえぞ！」
「私が許したから、それでいいのっ」
「何わけわかんねえ理屈をフイてやがる！」
（あーもう！なるようになっちまえ！）
あれさえ見られなければいい。あれさえ、見られなけれ

ば。

「わー！キレー！」
尚人の自宅は、学校から徒歩で１５分ほどのところにあるマンションの一室だった。ごくありふれた部屋の間取りで、ソファやテーブルが見栄えよくしつらえられている。
「そのへんに適当に座っとけよ。俺は着替えてくるからさ」
「オッケー」
尚人の部屋の扉が閉まって、あらためて室内を見まわしてみる。白い壁。オーディオラックにはＭＤコンポとゲーム機。テレビ台には、中型のテレビとビデオデッキ。テーブルには新聞。
（ウチのと同じだ）
何気なくそれを手にとって、開いてみる。すると、ドサッ、という音とともに、鈴音のひざの上に何かが落ちてきた。
（あ、これもウチと同じ）
スポーツ新聞だ。鈴音の父親も、時折買ってくる。
「お前、新聞なんて読むのか？」
着替えを終えた尚人が、キッチンに向かいながら問いかけてくる。
「たまーにね。あんまり頻繁には読まないけど」
そう言って、鈴音は新聞をたたんでテーブルに置いた。
「はいよ」
尚人が紅茶の入ったカップを差し出す。鈴音も素直に受け取った。

「ありがと」
渡されたカップをすすりつつ、ふたたび部屋を見まわしてみる。
「親は？仕事かなんか？」
「いや、親とは一緒に住んでない」
「１人暮し！？」
「いや、それも違うんだな」
「え？どういうこと？」
「Ｃ組に本間敦宏（ほんまあつひろ）っているだろ。あいつと２人暮しだ」
「へぇー。どういうつながり？」
「出身中学が一緒なんだ。あ、俺たち中等部からのエレベーターじゃないわけね」
「ふーん。どこの中学？」
「豊田中。愛知の」
「愛知！？そんなとこから来たの！？なんで！？」
「都心に近いからな。大学いったらどうせ１人暮しだし、高校から慣れとくのもいいだろ」
「あー、なるほどね」
また紅茶をすする。と、今度は尚人が質問してきた。
「で、何しに来たわけ？」
「は？」
「は？じゃねえよ。何か目的があってきたんだろ？」
「あーそうそう。部屋見せてよ」
「見せてんじゃん」
「じゃなくて、真下くんの部屋」
「尚人でいいよ。名字で呼ばれんのは慣れてない」
「じゃあ、尚人くんの部屋」
「何のために？」
「ちょっと調べたいことがあるから」
「何を調べるんだよ？」

「なんでもいいじゃない」
「よかねえよ。そんなんで部屋見せられるか」
「ちょっとだけでいいから」
「ちょっとだけって言われてもなあ…」
「でも、それじゃあここに来た意味がないのよ」
尚人はしばらく考え込んだあと、ため息まじりに言った。
「わかったよ。少しだけだからな」
「ほんとに！？ありがとう！！」
満面の笑みを浮かべ、鈴音はたちあがって尚人をせかす。
「早く！はやく！」
「っるせえな。少しは待つってことができねえのかよ」
「私の辞書に、そんな言葉はないわよ」
「イノシシか、お前は」
「失礼ね。そんなことより、早く見せてよ」
「へいへい。ほらよ、ここだ」
十数分前に開けたドアをふたたび開き、尚人は中に入っていく。鈴音もあとに続く。
「普通、だね」
「当たり前だろ。親と一緒に住んでないってこと以外は、お前らと何も変わらねえよ」
「まあ、そうだよね…」
何の変哲もない部屋。リビングと同じ白い壁には、アーティストのポスターが何枚か貼られている。そのうちのひとつはカレンダーだ。あとは机にベッド、それにパソコン。
「このパソコン、尚人くんの？」
「ん、ああ。高校入るときに、親に買ってもらった」
「お金持ちだね」
「１０万しねえよ。８万強くらいだ」

「中身[※6]は？」
「ネットで落とす[※7]。そのほうが安上がりだからな」
「あ、なるほどね」
パソコンの脇には大きなプリンタが置かれ、その隣にはタンスがある。
「タンスの中は？」
「は？服とかだよ」
「他は？」
「他には…別に何もねえ。あ、上に引出しには小物とかが入ってる」
「ちょっと見せて」
「別にいいけど」
中には櫛や鏡、アクセサリー類などが入っていた。
（…この部屋にはないみたいね）
「おっけ。ありがと」
「もういいのか？」
「うん。この部屋にはないってわかったから」
「何が？」
「なんでもない。気にしないで」
「ふーん…」
リビングに戻ってソファにすわり、また紅茶をすする。
「あ…」
「どうした？」
「…冷めてる」
「そりゃそうだろうな。淹(い)れてから大分(だいぶ)たってるし」
「おかわり

※6 中身…ソフトウェアのこと。
※7 ネットで落とす…インターネット上のホームページからダウンロードすること。

「図々しいヤツだな」
「だって自分じゃできないもん」
「はいはい。ちょっと待ってろ」
鈴音からカップを受け取り、尚人はキッチンに向かう。
棚から新しいティーバッグを取り出して、湯を注ぐ。
「お前、帰らないのか？」
「本間くんの部屋も見せてもらう」
「じゃあ見てったらいいじゃねえか」
「本人の許可なしに入るのは、さすがに気が引ける」
「今さら何言ってんだ」
「え？何か言った？」
「いーや、なんでもねえよ」
もともと、ここに入れる許可など与えていないのだが。
（こいつの性格が、こんなんだとは思わなかったな）
今さら後悔しても遅い。鈴音に関わった時点で、歯車は狂い始めているのだ。
「本間くん、遅いね。部活でもやってるの？」
「いや、何もやってない。どっかに寄り道でもしてんじゃねえか？」
「いつ帰ってくるの？」
「さあな。あいつの帰宅時間は日によってまちまちだからな」
「連絡とれない？」
「ザウルスがつながれば」
「ザウルス？」
「ポケコン※8のザウルス。知ってるだろ？」
「あー、あれね。本間くん、あんなの持ってるの？」
「いろいろついてるからな。辞書とかスケジュール帳と

※8 ポケコン…ポケットコンピュータ。

か」
「メールとかもできるんだっけ」
「ああ。俺も持ってるぜ。ほら」
そう言って、尚人は腰に下げてある携帯ケースから、メタリックブルーにカラーリングされたポケコンを取り出した。ふたを上げて、操作しはじめる。
「何してんの？」
「宏(ひろ)にメール入れてんの。あ、宏って敦宏のことね」
「ふーん…。あ、私のもアドレス教えてよ。Ｅメールでしょ？」
「なんでお前に教える必要がある？」
「また何か頼むかもしれないからさ」
「ンなもん、学校で言えばいいだろーが」
「家にいたら連絡とれないじゃん」
「別にとれなくたっていいだろ」
「私がよくないの。ほら、かして」
「あっ！返せ！」
画面にはちょうどメールの作成画面が表示されていて、もちろん尚人のメールアドレスも表示されていた。鈴音はすばやくそれを自分の携帯に入力する。
「さんきゅー」
「ったく…。俺はメールしねえぞ」
「いいよ別に。私からするから」
「やめろ。宏に見つかったらマズイ」
「何がマズイの？」
「訊くな！」
「なんかアヤシイ…」
「別にあやしいことなんかねえよ」
「ふーん…。ねえ、『オメガ』って何？」
「は？」

「ほら、あんたのアドレスのドメイン[※9]についてる『オメガ』」
「俺が契約してるプロバイダだよ」
「そんなプロバイダ、あったっけ？」
「現に俺が使ってるじゃねえか」
「まあ、ね…」
と、返事はしたものの、鈴音の心は釈然としなかった。
（そんなプロバイダ、聞いたことない）
オメガ。
（帰ったら調べてみよう）
プロバイダ名で引っかからなかった、そのときは。
（『オメガ』がカギを握ってるってことね）
「おい、藤本？」
「へ？」
「どいした、ボーっとして？」
「ううん、なんでもない。気にしないで。それと」
「あ？」
「私も、鈴音、でいいよ」
「？何が？」
「呼び方。あ、でも、みんなリンちゃんって呼ぶからそっちのほうがいいな」
「ちょっとまて。俺にどう呼べって？」
「だから、リンちゃんって…」
「呼べるか！バカ！」
「じゃあなんて呼ぶの？」
「名字でいいだろ！」
「私、自分の名字って嫌いだからヤダ」

※9 ドメイン…メールアドレスの、アットマークから後ろの部分。普通は契約しているプロバイダの名前や、アドレスを発行している企業名がはいる。

「むううう…。じゃあ」
「ん？」
「『リン』でいいだろ？」
「あ、いいよ、それで」
「よし。じゃあ決まりだな」
「うん！」
そのとき、玄関の扉が開いて、敦宏が帰ってきた。
「ただいまー…。誰だ、そいつ」
「おかえり。俺のクラスの藤本鈴音。通称『リン』」
「おかえりなさい、本間くん」
「あー、あんたが藤本鈴音か。昼休みとかによくしゃべってるだろ」
「そうそう！聞いてくれてるんだ！」
「あんたの声は聞きたくなくても耳に入るんだよ」
「それ、イヤミ？」
「そう聞こえなかったか？」
そう言い残して、敦宏は先刻尚人が入っていった部屋とは別の部屋に入っていく。その扉を閉める少し前、敦宏は振り返ってこう言った。
「あー、俺のことは宏でいいから。よろしく、リンちゃん」
その口調は、心底だるそうだ。部活はやっていないと尚人は言っていたが。
「本間く…宏くん、何かあったの？」
「さあ、俺は何も知らねえ。あいつ、自分のことってあんまり話さないから。」
「内気な性格？」
「いや、そうじゃないんだけど、なんつーか、心に壁を作ってるっつーか…」
「外との接触を拒んでる？」

「心が、な」
「ふーん…」
鈴音は、敦宏が入って閉じられた扉を呆然と眺めていた。
　しばらくして敦宏が部屋から出てくると、鈴音は待ってましたといわんばかりに頼み込んだ。
「宏くん、部屋の中見せて」
「あ？」
「ちょっと探し物してるの。だから、お願い」
「…ご自由にどうぞ。見られて困るようなモンは置いてないから」
「本当？ありがとう」
鈴音は立ちあがって、無遠慮に敦宏の部屋に入っていく。敦宏の部屋も、尚人に部屋と同じように。
（普通の部屋だなあ）
ただ、壁にポスターなどは 1 枚もなく、カレンダーすら見当たらないし、パソコンの脇にあるタンスも、尚人のものにくらべると小さめだ。
（このパソコンも、宏くんのものか…）
「ねえ宏くん、タンスのなか、見てもいい？」
「ご自由にどうぞって言ったろ」
「ありがと」
タンスの引出しの中には、尚人の部屋と同じように鏡とアクセサリー、手袋やマフラーなども入っていた。
（ここにもないのか…）
引出しを元に戻して部屋を出る。リビングでは、敦宏も紅茶をすすっていた。
「探しものは見つかったかい？」
「ううん、なかった」
「そりゃー、残念でした」
まるっきり興味なし、といった感じで敦宏が言う。鈴音

は何も言い返せずに嘆息する。
　ソファに座ろうとしたとき、視線の先にもうひとつの扉を見つけた。玄関を入ってすぐ脇だ。
（あの扉…）
自分の直感が、なにやらよからぬ雰囲気を察知している。よくみれば、あの扉だけ周りの壁と質感が違う。
（見てみる価値は十分あるわね）
鈴音は立ちあがって、まっすぐその扉に向かっていく。
「リン？帰るのか？」
「鞄が置きっぱなしだろ。帰るわけじゃないらしい」
「じゃあトイレか？」
「リンちゃんは、うちのトイレの場所なんか知ってるのか？」
「いや…そうだよな…じゃあ」
「…まさか」
「気づかれた！？」
ガチャリ、と扉の開く音がする。かすかに中が見えかけたとき、尚人が扉をつかんで止めた。
（――っ！？）
尚人は何も言わず、強引に扉を閉めた。顔は焦りの色で満ちている。
（…ビンゴ？）
「ここは、見るな…」
「あ…」
（でも、少し見えたよ）
あれって、もしかして―――

『該当する項目はありません　キーワード：プロバイダオメガ』
（やっぱりね）
マウスをクリックして、画面を印刷する。パソコンの脇にあるプリンタが小気味よい音を立てて紙をはきだす。
　尚人の家から戻った鈴音は、さっそくインターネットで『オメガ』という名のプロバイダを検索したのだ。そして、前述の結果を得た。
（少々問いただしてみる必要がありそうね。それに）
あの扉の向こうにあったもの。蛍光灯に照らされて黒く光っていたもの。いくつも並べられた細長い筒状のもの。ここ最近の新聞を騒がせているもの。
「一体、どういうことかしらね…」
鈴音は携帯をとりだし、ターボスクロールから「真下尚人」という項目を呼び出した。そこに記されたアルファベットの羅列をじっと見つめる。
（あの事件も、あんたの仕業なの？）
ビルの窓にいたのもあんた？だとしたら――
（大変な秘密を握っちゃってるわね、私）
携帯をしまってパソコンの電源を落とす。ふと思い出した。
（化学のレポート、明日までじゃん！！）
「やっばいっ！！」
時計は８時少しすぎを指している。このままだと。
（また徹夜？）
「うっげぇ…」
尚人のことなど、一瞬で頭から消えた鈴音であった。

　尚人の表情は凍りついていた。焦りが思考を混乱させる。
（やっちまった…）
前回あの部屋に入ったのは自分。うっかりして、鍵をかけ忘れた。
「スマン、宏。俺のミスだ…」
「まったくもって、そのとおりだな」
敦宏が冷たく突き放す。こんな事態になったというのに、敦宏は呑気（のんき）にコーヒーを飲んでいる。
「お前があの部屋の鍵をかけ忘れたせいで、リンちゃんに中を見られ、その秘密を知られたかも知れず、俺はそのとばっちりを食らったというわけだ」
「だから悪かったって。ホンットに反省してるよ…」
「反省したところで、何も始まらないな。組織から制裁が下るのも時間の問題だろう」
「あの、さ…もしかして、あいつが…その…」
「可能性がないとは言えないな」
尚人は、ドキリ、とする。自分の犯したミスのせいで、もしかしたら鈴音は組織に―――
（クソッたれ！！）
それがいつ起こるのか。明日か、明後日か。尚人にそれを知る術はない。
「！！」
敦宏の部屋にあるパソコンが音を発した。組織からの『指示』を受信したのだ。敦宏がするより早く、尚人がパソコンにかじりつく。
「何の指示だ？いつもどおりか？」
「…ああ、そうみてえだぜ」
尚人はホッと胸をなでおろす。こんなに早く組織に知られるとは思えないが、それでもあの組織のことだ。油断

はできない。
「ターゲットは八嶋修平。株式会社ランドフロック副社長。年齢は５７。妻と、すでに結婚している娘が１人」
「またか。どうやら幹部クラスってのは、意外と他からの恨みなんかが多いらしいな」
「みてえだな。こんなご時世だし、企業は生き残りに必死なんだろ」
「添付ファイルを立ち上げろ。印刷する」
「ＯＫ」
マウスを操作して、添付ファイルを印刷する。プリンタが規則正しく動き、地図などが印刷された紙をはきだしていく。
「ん？」
尚人は、ウインドウの右端にあるスクロールバーが不自然に短くなっているのに気づいた。いつもならこんなに短くはならないはず。マウスでスクロールバーを下ろしていく。
「…備考？」
「なんだ？追加指示か？」
「わかんねえけど…」
さらにスクロールバーを下ろし、文書を読み進めていく。
「今回の仕事には…なっ…！！」
そこに記された指示を目にして、尚人は絶句した。傍らにいた敦宏さえも、さすがに声が出ない。
「なんてこった…」
まさか、こんな指示がくるとは。

“ 実行時、藤本鈴音を同伴させること ”

「さて…」
部室にある自分にパソコンの前に座って、陽はきりだした。
「そろそろ来年度予算の申請をしなきゃいけないんだけどさ」
陽の前には、奈央や大地、鈴音など、今年と来年の報道部の首脳陣が集まっている。
「何か必要なものはあるかい？」
面々はしばらく考えたあと、一斉に言い始めた。
「デジカメ。ビデオのほう」
「ワープロ廃止。完全パソコン化希望」
「ＬＡＮの拡張。新聞主任席からもプリンタにつなごう」
「写真用のデジカメも必要です」
「バッテリー」
「ドラムリール」
「電球」
「スイッチボックス」
「ツールセット」
「机と棚をいくつか」
「小物入れもね」
「モニターも」
「スピーカーも足りない」
「ＣＤケース」
「じゃあＭＤケースも」
「ケースだけじゃなくて、ＭＤもね」
「ＣＤ－Ｒ録音機」
「ンなもんいらねえよ」
「あ、コードも足りなかった気がする」
「延長コードとか」

「新聞用の紙」
「そんなの、印刷室からパクってきなよ」
「プリンタのインク」
「レーザーだから、トナーでしょ？」
「あ、そうか」
「…」
騒がしくなるのが突然なら、静まり返るのも突然だ。
「こんなもんかい？」
「そんなもんだろ」
「そんなもんでしょ」
「そのくらいでしょう」
「じゃ、これで予算申請を出そう」
あまりにも自然に流されて、誰も気づかなかったが。
「陽、もしかしてお前、今の全部メモったのか？」と大地。
「ん？当然だろ。でないと申請できないじゃん」
「あの速さで？あの量を？」
「ああ。もちろん」
その場にいた全員が顔を見合わせる。
「これぞまさしく」
「本当に」
「このことを言うんですね」
「？何のことだ？」
ひと呼吸おいて、大地が言った。
「これが本当の、ゴッドフィンガー」
「あのなあ…別に爆熱とかしてないから」
「爆熱してたら恐いわよ」
「全部溶けちゃいますよ」
「だからしてないってば」
「あのぉ…」

そばで会話を聞いていた牡丹が口を挟んだ。
「今のって、もしかしてガンダ」
「さあーて、物品の値段を調べないと」
「俺も、ＡＧプレスの仕上げがあるんだった」
「私も早いとこお昼食べちゃおっと」
「あっ、あのっ…」
「瀬戸さん、ちょっと話が」
「はいよ。ちょっと待ってね」
セリフを途中で打ち切られ、一人取り残された牡丹は思った。
（私だけじゃないのかなあ…）
少なくとも、今の４人はそれである、と牡丹は確信していた。

「尚人くん」
たったの１日で聞き慣れてしまった声で自分の名前を呼ばれ、尚人はドキリ、とする。が、表情には出さない。
「なんだ？」
「話があるの。放課後、つきあって」
「話くらい、今済ませろ」
「困るのはあなたよ」
そう言われて尚人は、うっ、と言葉に詰まる。その科白（せりふ）の意味は、つまり。
（やっぱり、バレたのか）
「じゃ、そういうことで、放課後ね」
「ああ…」
自分にもほとんど聞こえないくらいの声で返事をして、尚人はその場に立ち尽くす。

（バレたもんは仕方ないってか）
そして、全てを知った鈴音に待っているものは―――
（クソッたれが！！）
そのための口実作りか、あの指示は。そうなのだとしたら、鈴音を連れていくわけにはいかない。
（どうするよ、宏）
少しのことで思考が混乱する自分の頭で考えるより、いつでも沈着冷静な敦宏の考えを聞いてみるほうが得策かもしれない。尚人はザウルスを取り出し、敦宏にメールを送った。
（あいつが真面目な答えを返すかどうかわかんねえけど）
数十秒で返信メールがきた。
『自分でまいた種は、自分でなんとかするんだな』
（あンのやろォ…）
と思ったとき、ザウルスがふたたびメールを受信した。
『話がある。今日は誰も連れてくるなよ。なるべく早く帰って来い』
「誰も連れてくるなってことは…」
（仕事がらみか）
ＯＫ、と返信してザウルスをしまった。
（家に帰る前に、窮地にたたされなきゃいいけど）
尚人の危惧は現実のものとなる。

「オメガってなんなの？」
鈴音は単刀直入に訊いてきた。放課後に物理室。赤学の特別教室は、許可さえとれば誰でも自由に使用できる。今ここにいるのは、鈴音と尚人だけだった。

「は？」
「とぼけないで。あなたのメールアドレスにある『オメガ』よ。一体なんなの？」
「俺が使ってるプロバイダだった言ったろ？」
「嘘！」
鈴音は強い口調で言い放った。思わず尚人も閉口する。
「プロバイダなんかじゃない」
「どうしてそう言いきれんだよ？」
鈴音は鞄から１枚の紙切れを出して、尚人に見せた。
「昨日、帰ってから検索したのよ。ご覧の通り、１件もヒットしてないわ」
尚人は、紙に印刷された文字の羅列をながめていた。鈴音がふたたび口を開く。
「これの意味、わかるわよね？」
鈴音は紙をしまい、尚人に向き直る。視線が交錯する。
「オメガなんていうプロバイダは存在しないってことよ！」
ほとんど叫ぶようなかんじになっている。尚人は先刻から黙ったままだ。
「正直に話して。オメガって一体何？」
それでも尚人は何も言わない。かたくなに沈黙を守っている。鈴音が半ばあきらめかけた、そのとき。
「悪ィけど…」
尚人が口を開いた。が、口調はこの上なく重い。
「今は…話せる時期じゃない…」
「どうして！？」
「どうしてもだ」
「納得いかないよ！ちゃんと話してよ！」
「ゴメン…」
「なんでよ！どうしてよ…！」

鈴音の口調が急に弱くなった。尚人にギリギリ聞こえる程度だ。
「宏に呼び出されてんだ。悪いが、俺は帰るぜ」
そう言って尚人が扉に向き直ったとき」
「あの部屋…」
鈴音が、ほとんど独り言に聞こえるほど小さな声で言った。
「あの部屋にあったのってさ…」
とても小さく、それでも意思の伝わる口調だ。
「あれって…」
突然、鈴音は何も言えなくなった。尚人が鈴音の口をふさいだのだ。
「それ以上言うな…っ」
「…？」
「俺だってなあ…」
（尚人…くん…？）
「好きでやってんじゃ…ねえんだよ…」
（あれ…？）
ようやくな音が手を離した。そのまま、ふたたび扉に向かっていく。
「尚人くん…」
尚人の姿が見えなくなった。鈴音はその場に呆然と立ち尽くしている。
（尚人くん…さっき…）
泣いてた———

「ずいぶん遅かっ…尚人？」
普段なら絶対見せるはずのない尚人の表情に、敦宏は

少々驚いた。いつもの陽気で活発な表情が消えうせ、何かを思いつめたような色が支配している。
「何があった？」
尚人は無言のまま、倒れこむようにソファに座った。よく見れば、目には涙を浮かべている。
「帰ってくるまでの間に何があったんだ、尚人？」
「宏…」
「なんだ？」
「俺たちさ…何のためにこんなことしてんのかな…」
「なに？」
「俺…どうして…こんなこと…」
しばしの沈黙。敦宏はある考えに思い至った。
「リンちゃんに会ったな？」
「…ああ」
「何を言われた？」
「何も言われちゃいねえよ。ただ…」
「今さら恐くなったか？」
「そんな！そういう…わけじゃ…」
敦宏は呆れかえった様子で嘆息する。いきなり情緒不安定になられても困る。
「尚人」
敦宏は意を決した。こういうときは、さっさと終わらせたほうがいい。
「明日、決行するぞ」
「え…？」
「明日、仕事を決行する。そういうわけで、リンちゃんには話をつけとけ」
「ちょっと待てよ！なんだってそんな急に！」
「さっさと終わらせたほうがいいだろう。俺だって、これ以上欠課時数をふやしたくない」

「そんな…俺、今やったって、できる自信ねえよ…」
「尚人」
敦宏が静かに言った。諭すように。
「迷ってんなら、１発ぶっ放せ。今の状態じゃ、とても仕事なんかできない」
「…」
「少し出かけてくる。その間に、頭を冷やしておくんだな」
敦宏は脇においてあったジャケットを手に取り、立ち上がった。そのままドアに向かっていく。
（俺だってな）
ドアを開けながら思う。尚人だけではない。他ならぬ自分でさえ。
（今やってることの意味なんか、わかっちゃいないさ）
眼下に広がる公園では、子供たちが楽しそうに遊んでいた。

　明かりのない窓。誰もいない家。薄暗い玄関。空しく響く足音。散らかった部屋。物があふれる机。壊れた棚。潰れたボール。破れたカレンダー。さびついたメダル。
　思い出したくない過去。埋められない過去。記憶に焼きついた光景。永遠に癒えない傷。治療法のない病。自分の右手。めぐる記憶。やさしかった母。どんな話も聞いてくれた母。その母を殴った父。憎悪の対象となった父。唯一の願い。

　ただ、母さんを助けたかった。だから―――

　自分の右手。握られたもの。全てを失った日。願いがかなった日。家にいられなくなった日。家を去った日。あとに残したもの。

　あの日、あの時、あの家で。

　俺は、親父を殺した。

　ガシャン―――
　テーブルに置かれたグラスが割れた。そこに赤い水が広がっていく。自分の右手も赤く染まり始める。痛みはない。痛みなど感じるはずがない。今できた右手の傷など、この心に刻まれた傷に比べればなんでもない。
　過去に繰り返した疑問をまた問いかける。誰にでもない、自分自身に。
　自分はどうしてここに来た？
　自分はどうしてこんなことをしている？
　自分はどうしてこんなことができる？
　自分はどうして―――
「ッ…」
今になって、右手の痛みに気づいた。その痛みが新たな思考を浮かび上がらせる。
　どうしてここにきた？どうして組織に入った？そんな過去のことはどうでもいい。大切なのは今。自分が今何をするべきか。何をしなくてはならないのか。
　立ちあがって、玄関に向かって歩いていく。その途中にある扉。鍵を開け、中に入る。棚に並んでいるうちの、比較的小さな物を手に取り、その感触を確かめる。部屋

は防音壁で囲まれているので、音が外に漏れる心配はない。いくつかあるシューティングボックスのひとつに入り、かまえる。数メートル先には人型の的。その中央に狙いを定める。
（俺は…）
あの時と同じ。あの時も、こうして狙いを定めた。ただし、相手は的ではなく。
（俺は…）
あの時と同じ。何かを失うかもしれない。今ある全てを失うかもしれない。それでも。
（俺は…！！）
「やってやるッ！！」
ドォォン―――
耳鳴りがする。衝撃が頭に響いている。それが、決意をより確かなものにする。
　人型の的があの時の光景に重なった。自分の目の前で倒れた父。そのあと決して動かなかった父。焦煙の匂い。心に刻まれた傷。でも。
（俺はもう、迷わない）
リビングに戻り、ザウルスを操作してメールを送る。
『話がある。７時に中央公園で待つ』

「はあ…」
息が白い。時計は６時４７分を示している。
（ちょっと早く着きすぎちゃったかな）
手袋をはめた手を擦りあわせる。が、あまり効果がない。首にはマフラー、耳には耳あてまではめているのに、体の芯まで凍るほど寒い。

（一体、何の用だろ）
１時間ほど前に鈴音は尚人にメールで呼び出され、待ち合わせ場所の公園にやってきたのだ。『話がある』とだけ記されたメールに、話の内容を訊き返したのだが返事はなかった。
（それにしても）
話なら学校で済ませろと自分で言っておきながら。
（しかも）
自分からはメールしないなどと言っておきながら。
（言ってることとやってることが違うじゃない）
「はあ…」
ふたたび白い息を吐き出す。時刻は６時５１分。
（時間の進みが遅い…）
勉強しているときや本を読んでいるときとはくらべものにならないほど、１分１分が長く感じる。
（寒いんだから早く来なさいよ！）
「あ」
１台のバイクが公園に入ってきた。鈴音から少々離れたところに停車し、エンジンが止まる。フルフェイスのヘルメットの下から現れた顔は、鈴音のよく知ったものだった。
「遅いッ！！」
バイクを降りようとした尚人に、鈴音はいきなり怒鳴りかかる。
「何分待たせてんのよ！女の子を待たせるなんて最低！」
「何分待ったんだよ？」
「２０分！」
「お前、そんな前からいたのか？」
「そうよ！」

「アホらし」
「ぬわんですって！！」
「７時に待つって言ったはずだぞ。７時に来ればいいじゃねえか」
「私の辞書に待つって言葉はないのよ！！」
「あーそうだったな。それと」
「なによ！まだ何かあんの！？」
「近所迷惑だから、大声で騒ぐのはやめろ」
「あ…ごめん」
お？と尚人は首をかしげる。
「やけに素直だな」
「私だって、自分の非ぐらい認めるわよ」
「ウソばっか」
「なんか言った？」
「いんや、なんでもねえ。それより」
「ん？」
「明日の夜、あいてるか？」
「明日の夜？用事はないけど、どうして？」
「７時から１０時くらいまでなんだけど、大丈夫か？」
「明日はゼミもないから大丈夫よ」
「じゃあ決まりだ。明日の夜、俺たちに付き合ってくれ」
「なんで？なにかあるの？」
「あるから言ってんだろ」
「何があるの？」
「それは、な…」
一度言葉を切る。口にするには相当の覚悟が必要だ。一応してきたつもりだったのだが、いざ言うとなるとやはり抵抗がある。
「明日、俺たちの秘密をお前にバラす。俺たちの、できれば誰にも知られたくない秘密だ」

「秘密？」
「多分、お前も知りたがってることだろ」
鈴音はドキリ、とする。自分が今１番知りたいことと言えば。
「尚人くん…それってさ…」
「なんだ？」
「それって…私なんかに知られていいようなことじゃない…と思うんだけど…」
「だから言っただろ。できれば誰にも知られたくないって」
「じゃあ、どうして…？」
「まあ、指示だからな。仕方ない」
「指示？」
「そのへんについては、明日話せると思う。明日、全部終わったらな」
「全部…終わったら…？」
「そうだ。全部終わったらだ」
「全部…」
鈴音の頭は、ほとんど何も考えていなかった。今まで彼らに気づかれないように探ってきたのに、尚人はそれを自分から明かすと言っているのだ。それに、誰にも知られたくない秘密と言われれば、鈴音の考えるところと相違はないだろう。
「話はそれだけだ。明日の夜７時に、この公園に来てくれ。自転車とかでは来ないほうがいいな」
「…わかった」
「わざわざ呼び出して悪かったな。直接伝えたほうがいいと思ったから」
「…うん」
「じゃあな」

「じゃあ、ね…」
バイクのエンジンがかかる。尚人はヘルメットをかぶってバイクにまたがり、そのまま走り去った。
（１度ならず２度までも）
鈴音の心には、怒りとも緊張とも焦りともつかない、なんとも言えないモヤモヤが渦巻いていた。
「どうして…人をどん底に突き落とすのが好きかな…」
その場にへたり込んでしまう。全身の力が抜けていく。
「ばかやろぉ…」
バイクのタイヤの跡が、徐々に湿っていくのが見えた。

――――――　三章　――――――

　青い空に白い雲がぽっかり浮かんでいる。大海原を泳ぐ小船のように。ゆっくりと、しかし極めて確かに進んでいる。
（平和だなあ…）
平和だ。平和なのだ。何の違和感もない。まったくもって、平和な日常だ。
「――てるの？藤本さん？聞いてるの？」
「…はい？」
突然現実に引き戻され、生返事になってしまう。頭がボーっとしている。
「さっきからずっと、心ここにあらずって感じよ。どうしたの？」
「あー…すいません…」
「本当にしっかりしてよ。９２ページの３行目から口語訳して」
「はい…」
教科書に向かい、古語の羅列を現代語になおしていく。とはいえ、頭ではまったく別のことを考えていた。
（平和な日と書いて、平日かあ…）
おそらくその推測は間違っているだろうが、そうとは思えないほど、のどかなひとときだ。
（あと７時間か…）
あと７時間で、鈴音はおそらく極めて非日常的な光景を目にすることになる。昨日、家に帰ってからいろいろと考えてみたが、尚人の秘密で鈴音が知りたいことと言えば、やはりひとつしか思い当たらない。
「はああ…」
ため息とともに机に身を投げ出す。古文の授業などそっ

ちのけで、そのことばかり考えているのだ。
　窓の外では、広大は海に浮かぶ白い船が、あいも変わらず優雅に遊覧している。
（尚人くん、何考えてるかなあ…）
顔の向きを変えれば尚人の姿はすぐに見えるのだが、今はとてもそんな気分になれない。今は顔も見たくない。目を合わせてしまったら、自分がどんな顔をしたらいいのかわからない。
「ばかやろお…」
誰にも聞こえないようにひとりごちる。それは尚人に対してのものであると同時に、自分自身に向けたものでもあった。
（後悔したって、今さら遅いんだけどさ）
なんでこんなことになってしまったのだろう。やっぱり関わるのをやめればよかった。
「はあ…」
無駄な後悔と嘆息を繰り返し、うだうだと時間を過ごしていく。何を考える気にもなれない。
「———の口語訳、真下くん、お願い」
（——！！）
その名前を聞いた途端、思わず過剰に反応してしまう。
「はい」
（あれ…？）
声音も口調も普段通り。いつもの尚人の声だった。
（あ、でも、そうだよね…）
慣れているのだ。今日がはじめての自分とは違う。
（ずるいよ…）
尚人が淡々と文章を読み進める。その声を気にしながらも、鈴音は顔をあげなかった。
（こんなになってる私がバカみたいじゃん…）

尚人が読み終えたところでチャイムが鳴った。昼休みだ。
（午後は、尚人君と一緒の授業はないよね）
とりあえず学校が終わるまでは、尚人の声を聞くことはない。少しホッとした。
「―――起立、礼！」
鈴音は一目散に駆け出した。

　青い空に、白い雲がぽっかり浮かんでいる。時折吹き抜ける風は冷たく、今が冬だということを実感させる。その風に乗って――かどうかはわからないが、校庭から楽しげな声が聞こえてくる。おそらく中等部の生徒たちだろう。
「はああ…」
スカッとした青空とは対照的に、鈴音の心は沈んでいた。校舎の屋上。壁に背を預け、ひざを抱えて座りこんでいる。
「あーあ…」
傍らに置かれた自分の鞄に視線を向ける。中に弁当が入ってはいるが、まったく食欲がわかないので手をつけていない。食欲はわかないのだが。
「お腹減ったぁ…」
少しでも気分を紛らわそうと、鞄からＭＤウォークマンとヘッドホンを取り出し、最大音量でかき鳴らす。当然、ヘッドホンは耳にはかけない。
『――ありふれた日常　いつもどおりの怠惰な日々――』
（あー、これはいいや）
そう思って、曲を飛ばそうとリモコンに手をかけたとき。

『――不平があるなら、不満があるなら、ありったけ全部ぶちまけろ――』
（―――！）
不平も不満も大いにある。そのせいで朝から気分がすぐれないのだ。
（そっか…そうだよね…）
いっそのこと、全部吐き出してしまえばいいのだ。ここは屋上。大声で叫んでも、誰に聞こえるわけでもない。
（よぉーし…）
鈴音は立ちあがった。柵に向かって歩き、身を乗り出す。大きく息を吸いこみ、そして―――
「尚人のバカヤロォォーーーー！！！」
胸のつっかえが一気に取れた感じがする。かなり気分が楽になった。柵から降りて、ふぅ、とひと息ついたそのとき。
「バカヤローとはご挨拶だな」
（どっきーん！）
聞き覚えのある声。振りかえるまでもない。
（ヤバイ…）
「人が心配して来てみれば、いきなりそれかよ」
「あんたさあ…」
「あん？」
「せっかくすっきりしたのに、いきなり嫌な気分にさせないでよ！！」
鈴音は開き直った。こうなれば、いつものテンションを装って押しきってしまえばいい。
　尚人は何も言わなかった。壁に寄りかかって、視線をそらしている。
「何か言いなさいよ！ちょっと！」
尚人に詰め寄る。それでも尚人は視線をそらしたまま、

何も言わない。
「ちょっと！聞いてるの！？」
「悪いな…」
「え…？」
「こんなことになって、悪いと思ってる…」
鈴音は目を見張った。予想だにしない言葉だった。
「だいたい察しがついてんだろ？俺たちの秘密のこと」
「え…あ…」
「あんなとこ見られりゃな。俺も、とことんツイてない」
「尚人くん…」
「今こんな状態になってるのは、十中八九俺の責任だ。本当にすまないと思ってる」
「いいって…。首を突っ込んだ私も悪いし…」
「それ」
「え？」
「最後の１割はそれ。お前が近づいてこなきゃ、こんなことになってない」
「あ…あんたねえ…」
鈴音が反論しようとしたとき、尚人が鈴音の肩に手を添えた。耳元に顔を近づけて、一言。
「————」
「え…」
あまりに衝撃的な言葉に、鈴音は絶句する。
「ごめんな」
そう言い残して、尚人は校舎の中へと消えていった。鈴音はまだ、尚人の行ったことが信じられずにいる。
（これで何回目よ…）
また突き落とされた。毎度毎度、尚人は残酷なことをさらりと言ってのける。いや、もしかしたら尚人自身も苦しんでいるのだろうか。悔やんでいるのだろうか。

（もう…いや…）
「バカ尚人…」
冷たい風が吹き付ける。校庭から聞こえる声とＭＤウォークマンからかすかに流れる曲が、鈴音の耳にむなしく響いていた。

「―――テレフタル酸[※11]―――縮重合（しゅくじゅうごう）[※11]―――」
あと何時間…？
「―――の部分―――エステル結合[※12]―――」
５時間くらいか…
「―――このとき---が生成する。藤本。藤本！」
「…はい？」
「どこ見てるんだ？ノートはとってるのか？」
「あー…いえ、すいません…」
「しっかりしろよ。最近おかしいぞ」
「はい。すいません」
昼休みに鬱憤（うっぷん）を晴らして気が楽になるかと思いきや、尚人の余計な一言でまた気が重くなってしまった。
（まったく、あいつは人の気も知らないで）
少しはこっちの気持ちも考えなさいよ、と言ったら、尚人はどういうだろうか。あの日の昼休みが思い出される。あの尚人のことだ、わかってたまるか、とでも言うに違

[※11] テレフタル酸…ベンゼン環にカルボキシル基が２つ結合した有機化合物。エチレングリコールと縮合重合することでポリエチレンテレフタレートを生成する。
[※12] エステル結合…１つの炭素と２つの酸素が、鎖状枝分かれ状に結合したかたち。エステルを生成するために必要。

いない。
（でも、そういう私も、あいつの気持ちなんかあんまり考えたことないのよね）
人の振り見て我が振りなおせとはよく言ったものである。相手に気持ちをわかってもらうには、まず自分が相手の気持ちを理解しなければならないと言うことか。
（でも…）
尚人の一言が胸に突き刺さる。心臓を射抜かれたような衝撃。
（そんなの、絶対にイヤ）
なぜそんなことをされなければならない？尚人は、誰にも知られたくないと言っていた。それは鈴音にもわかる。それでも、鈴音が誰にも言わなければいいだけのことではないのか。
（そんじょそこらの問題とは違うのはわかるけどさあ）
それはわかるが、しかし。
（記憶を消されるなんて絶対にイヤ。死んでもイヤ）
そんなことになったらどうなる。尚人と過ごした時間が全て消えてしまう。
（確かに、そんなにいい思い出はないし、時間もかなり短いけど）
それでも、自分の中から尚人の存在が消えてしまうのはなんとなく嫌だった。
「———本！」
（何があったって！）
「———藤本！」
（私の記憶を消させなんかしない！）
「藤本！！」
「はい！！」
大声を通り越して叫んでいた。その場の誰もがたじろぐ。

「そんなに大声出さなくていいが…」
「あ…すいません…」
「まあいい。ナイロン６[※13]の原料は？」
「えーと…カプロラクタム[※13]？」
「そうだ、それが開環重合(かいかんじゅうごう)[※13]して―――」
（とにかく！）
すべては今夜始まる。そして、すべての結末も今夜。
（３時間のうちにすべてがある）
そのとき自分はどんな気持ちだろう。尚人のことをどう思っているだろう。
（あいつは…）
尚人は今何を考えているだろう。昼休みに尚人が口にした謝罪の言葉。あれは間違いなく本心だった。なんだかんだ言って、鈴音を心配しているのだ。
（そんなの、あいつに似合わないけどさ）
いつも活発に暴れまわっている尚人がいい。そうでないのは、尚人ではない気がする。
（…あれ？）
今気づいた。どうして尚人のことばかり考えているのだろう。どうしてこんなに気になるのだろう。
（…あ、あれ？？）
今気づいた。心臓の鼓動が速くなっている。
（ちょ、ちょっと…！）
考えれば考えるほど、鼓動は速まっていく。
「…リンちゃん？」
隣の席に友人に声をかけられ、思わず飛びあがりそうに

[※13] カプロラクタムは、炭素・酸素・窒素・水素からなる環状の化合物で、窒素と炭素の結合が切れて重合することによりナイロン６を生成する。これは、ナイロン６の単分子中に炭素が６つあることからこう呼ばれる。

なる。
「な、なに？」
「熱でもあるの？顔、真っ赤だよ？」
（えーーーーーー！！？？）
なぜだ。どうしてだ。どうしてこんなことに。
（一体全体、どういうことよ！？）
頬に触れてみると、熱く火照っていた。額に手を当てても、熱はない。わけがわからず、鈴音は混乱する。あたふたしていると、冷やかすようにチャイムが鳴った。
（あと１時間…）
最後の授業。胸の鼓動は一向に収まる気配を見せない。
（こんなの、あいつみに見られたらどうしよう…）
尚人と会わないことをただただ祈る鈴音であった。

　青い海。そこに浮かぶ白い小船。風という名の波にまかせて、自由気ままに泳いでいる。
（平和だよなあ…）
教師の言うこともたいして耳に入れず、尚人は空を見上げている。仕事をする日はいつも、こうして心を落ち着ける。こんなことは少なくないのだから、成績など上がるはずもない。
（あれを言ったのは余計だったかな…）
最後の一言で、鈴音が傷ついたのは確実だ。
（でも、言わないと俺がスッキリしないもんなあ…）
わしゃわしゃと髪をかきむしる。ジェルをぬった髪は硬く、変形するとすぐには戻らない。
（あ、ヤッベ…）
手ぐしを入れて髪形を戻す。まったく気分が落ち着かな

い。言いようのない焦りが渦巻いている。
（まあ、いつもとは状況が違うしな）
そう思って納得しようとするが、心は軽くならない。
「はあ…」
もう一度空を見上げる。海に浮かぶ小船は３つ。
（喜怒哀楽…ダメだ、１つ足りねえ）
そういえば、鈴音の表情でただ１つ見ていないものがある。「楽」だ。そんな状況ではないのかもしれないが。今の鈴音はどうだろう。怒っているだろうか。泣いているだろうか。
（あいつ、意外と泣き虫だからな）
女（イコール）＝泣き虫という方程式もほとんど通用しない時代だが、肝心なところではやはり涙をこぼすのが女というものなのだろうか。
　あとどれくらいの時間を一緒に過ごせるかわからない。その間に楽しそうな鈴音の笑顔が見られたらいいと思う。
「お？」
窓の端から新たな小船がやってきた。他のものより少し小さめの、真っ白な小船。
（面白いこともあるもんだな）
この小船は「楽」の印だろうか。だとすれば―――
（そうなったらいいけどな）
風に乗って漂う４つの雲を見上げ、尚人の心は少し軽くなった気がした。
（よし！今日もがんばりますか！）
試合開始のゴングのように、チャイムが教室に鳴り響いた。

「もうすぐ…か…」
時計の針は午後５時半を指している。学校から帰ってずっと、鈴音はベッドに仰向けに寝そべって、右手で目を覆っている。目の前が暗い。部屋の照明がかすかに透けて、薄暗い光を見せている。
「ふうう…」
緊張からか、心臓の波打つスピードが速くなっている。それでもこうして目を閉じて幾度か深呼吸すると、いくらか気分は落ち着いてくる。
「はああ…」
机の上に置いたＭＤウォークマンのヘッドホンから小さく曲が流れてくる。以前陽（あきら）に借りたヒーリングミュージックのＣＤを録音したものに、鈴音が持っている曲からなごみ系のものを選んで録り足したものだ。
（静かだなあ…）
両親は共働きで、夜にならないと帰ってこない。それに兄弟もいない。つまり、今家にいるのは鈴音ひとりだけなのだ。
　誰もいない家からは物音ひとつせず、窓を締めきっているので外からの音もほとんど聞こえない。その静寂が鈴音の心をさらに静めていく。聞こえてくるのは、ＭＤウォークマンの音と自分の心臓の鼓動だけ。
「ふううう…」
鈴音の頭はほとんど何も考えていなかった。ただ、なんともいえない、言葉にしがたい緊張感が体を支配している。今までこれほどの緊張感を味わったことがあっただろうか。
「はあああ…」
どれくらいの時間がたったろう。光のない世界では時間間隔が著しく鈍る。裏を返せば、時間という最も強固な

呪縛から開放されることになる。
（体が軽くなったかんじ…）
突然、昼休みの出来事が頭をよぎった。記憶抹消。
　同時に、この数日間のことが次々とよみがえる。通学路の途中で遭遇した現場。そこにあった顔。ほとんど初対面での、いきなりのケンカ。尚人の家で見たもの。キーワード『オメガ』。そして、尚人が一瞬見せた涙。
「ふう…」
それが全部消えてしまうのか。鈴音が望まなくても消されてしまうのか。拒否したとしても、消されてしまうのだろうか。
（…ヤダ）
失いたくない。たった数日間とはいえ、鈴音にとっては大切な「思い出」だ。尚人はどうかわからないが、鈴音は大切にしたいと思っている。
（それに、何より）
尚人の存在が自分から消えてしまうのは嫌だ。せっかく知り合えたというのに、たった数日でいなくなってしまうのは、なんとも後味が悪い。
（…イヤ。絶対にイヤ）
失ってたまるものか。もとより覚悟はできていた。が、記憶を差し出すのはごめんだ。
（そろそろ起きようかな）
目をあけると、窓の外はうっすらと暗くなっていた。時間は６時８分。すでに日没をすぎている。
（いよいよ、始まる）
決意を新たにする。何が起ころうと、全てをこの目で見とどけようと。消されてしまう記憶でも、少しの間でも覚えておこうと。
「ふうう…」

大きく息をはいて、服を着替え始める。紺のジーパンに茶色のシャツ、それにジャケット。
「いざ！！」
ピシャリと頬をたたき、自分を奮い立たせる。確かな足取りで部屋をあとにした。

「よう。待たせたな」
尚人がバイザーを持ち上げ、鈴音に視線をよこしてくる。授業中の目とも違う、真剣なまなざし。
「今日はギリギリに来たからそんなに待ってないわよ」
「そうか。まあいいや。乗れよ」
尚人がバイクの後部座席を示す。鈴音もうなずいてそこのまたがった。
「リンちゃん」
敦宏がヘルメットを投げてよこす。鈴音はヘルメットをかぶって尚人にしがみついた。
「よし。行くぜ」
２台のバイクが勢いよく発進する。バイザーの隙間から冷たい風が入ってくる。
（ホントに覚悟決めないと）
もう後戻りはできない。逃げ道はない。目の前の道をただまっすぐ突き進むだけ。
（上等よ！）
どんなに細い道だろうと、どんなに危ない橋だろうと、最後まで渡りきってやる。
（もう、迷ってなんかいないから）
夜の大通りを２台のバイクが疾走していった。

「着いたぞ」
幕張にほど近い高層ビル街。今回の仕事場所はここだ。
「リンちゃん、これ」
敦宏が差し出したのは小型の通信機だ。耳に着けるタイプのものらしい。
「これを使って指示出すから。リンちゃんはこちらの言うとおりに動いてくれ」
「わかった」
そう言って通信機を受け取る。敦宏が、小型のノートパソコンを取り出して操作し始めた。
「今俺たちがいるのがここ。お前たちが行くのはもうひとつ向こうのビルの７階だ。そこの非常階段から、反対側にいるターゲットを狙う」
パソコンに表示された地図を使って、敦宏が状況説明をしていく。
「俺はここで指示を出す。終わったら、すぐに引き上げる」
「いつもどおりだな」
「ああ。時計を合わせよう」
「ＯＫ。３…２…１…よし。じゃああとで」
「グッドラック」
「おう。リン、行くぞ」
「え、あ、うん」
尚人は肩に荷物を担ぎ、バイクを押して歩いて行く。鈴音もあとに続く。
「リン」
「え、なに？」
「絶対に俺のそばを離れるなよ。命がかかってることを

忘れんな」
「うん…」
命がかかっている。仕事をするのは尚人たちだが、同伴する以上は自分の命も危険さらされているのだ。
　尚人がバイクのスタンドを下ろし、固定する。肩の荷物を担ぎなおして、ひとつ息をついた。
「行くぞ」
「うん」
２人は並んで歩き出した。

「…６…７、ここだな」
「ここが、仕事場所？」
「そうだ。目の前に見えるあのビルの中にいるヤツがターゲットだ」
「誰もいないみたいだけど…？」
「今はな。もうすぐ現れる。それまでは準備して待機だ」
尚人が鞄からスタンドを取り出して立て、そしてライフル銃を取り出してセットした。
「っ…」
いざ目にすると声が出なくなる。黒光りする銃身。鈍く輝く引き金。底知れぬ闇を思わせる銃口。
（落ち着け、落ち着け…）
「…レーザーサイトは使わないの？」
「ビルは全面ガラス張りだし、ターゲットは正面を向いてるから、赤い光は目立つんだ。今回は自分の目でロック[※14]する」

[※14] ロック…ロック・オン。狙いを定めること。

「ふーん…」
沈黙が流れる。尚人はライフルのセッティングを終え、待機姿勢に入っている。
「あの、さ…」
「ん？なんだ？」
「…尚人くんは、どうしてこんなこと始めたの？あ、話したくないなら無理に話さなくてもいいよ」
「俺な、中２のときに親を殺したんだ」
「え―――」
衝撃だった。後頭部を鉄パイプで殴られた気分だ。
「俺の母さんはすごくしっかりした人で、朝から夜まで毎日働いてた。仕事に行く前にはちゃんと俺に分の夕飯を用意してくれてて、そういうので困ったことはなかった。でも親父は典型的はダメ人間で、毎日どっかに遊びに行って、帰ってきたら飲んだくれて、酒が切れたら母さんに当たってた。母さんが働いて稼いだ金も、結局は親父の借金返済でほとんど消えてたよ」
「…」
「俺はそんな母さんを見てられらなかった。なんとかして助けたかった。いろいろ考えてたときに、組織の幹部みたいのが来たんだよ」
「組織？」
「俺や宏がいるとこだよ。他にも俺たちみたいなヤツがたくさんいる」
「へえ…」
「で、その男が言ったんだよ。この銃をお前にやる。これを使えばお前に母さんは苦しみから解放されるんだってな受け取らない理由はなかったよ」
「それで、お父さんを…？」
「殺した。渡された銃でな。引き金を引いたらいきなり

親父が倒れるもんだから、最初はビビッたよ。」
「あの、それで…お母さんは？」
「わからねえ。そんときは仕事でいなかったし、俺は親父を撃ってすぐに組織のやつにつれていかれて施設に入れられた。それから１年半くらい訓練して、今に至る」
「…今までどれくらいの人を殺してきたの？」
「わからん。数えきれないほど撃ってきたからな。送られてくる指示をただこなしてきた。母さんとも全然会ってないし」
「会いたいと思わない？」
「合わせる顔がねえよ。こんなになっちまった俺の姿なんか見てほしくない。また母さんを苦しませるだけだからな」
（尚人くん…）
尚人も尚人なりに苦しんでいるのだ。いつか彼は言った。「好きでやっているのではない」と。
『尚人、リンちゃん』
耳元で声がした。敦宏から通信が入ったのだ。
『ターゲットのお出ましだ。今、正面玄関を入った』
「いよいよだ。リン、覚悟しとけよ」
「そんなの、とっくにできてる」
「よし」
『射程到達まで、７４秒だ』
「了解」
尚人はうつぶせに寝そべり、ライフルをかまえた。スコープを目にあてる。鈴音も、銃口が向く方向をじっと見つめている。
『６０秒』
心臓の鼓動が速くなっていく。日常との決別がすぐそこまで迫っている。

『３０秒』
「リン」
「え？」
「よく見てろよ。俺らがこのことを知られるのは、多分お前が始めてだ」
「う、うん」
しっかり見なければ。そして、全てを受け入れなければ。
『１０秒。カウントダウン始めるぞ』
「ＯＫ」
『７…６…５…』
ドクン、ドクン、ドクン、―――
『３…２…』
ドク、ドク、ドク、ドク、ドク―――
『１…到達』
　バシュッ！
「っ…！」
鈴音の視線の先でひとりの人間が倒れた。頭のあたりの床が、徐々に赤黒く染まっていくのが見える。
　目の前で、人が殺されたのだ。他でもない、尚人の手で。
「リン、急げ。引き上げるぞ」
「…あ…うん…っ」
尚人に言われて慌てて立ちあがる。階段を駆け下りる間も、今目にした光景が頭にこびりついて離れない。人が倒れた場面が何度もリフレインする。
「リン！早く！後ろに乗れ！」
尚人にヘルメットを渡され、それをかぶってバイクの後部席にまたがる。尚人はすぐにバイクを発進させた。
「っ…」
気分が悪い。吐き気がする。人が死ぬのを見るというの

は、頭で考えていたよりもはるかに衝撃的なものだった。尚人はこんな場面を何度となく見ているのだ。
「っ…はあ…っ」
バイザーを少し上げて風を入れる。冷たい風が、今はとても気持ちよかった。
　来るときに通った道を戻って、バイクは走り続けた。

「うっ…はっ…あっ…」
来る前に３人が集まった公園。２台のバイクが停めてある脇で、鈴音はうずくまって必死に吐き気と戦っていた。
「くっ…かはっ…」
「リン、大丈夫か？」
傍らで尚人が鈴音の背中をさすっている。はじめてあんなものを見たのだ。こうなるのも無理はない。
「はあ…はあ…」
「大分落ち着いてきたみたいだな」
「うん…大丈夫…ありがと…」
ふらつきながらも、鈴音は立ちあがった。深呼吸して息を整える。
「リンちゃん」
敦宏が口を開いた。鈴音の目をまっすぐ見ている。
「あれが、俺たちの最大の秘密だ」
鈴音はうなずいた。まだ息は荒い。
「尚人から聞いてると思うけど、もしかしたらリンちゃんの記憶を消すことになるかもしれない。それを判断するのは組織の連中だから、俺たちは何も意見できない」
「うん…」
「もし組織の連中が、リンちゃんに記憶を消すと判断し

ても―――」
「それを決めるのは僕らじゃないよ」
「―――！？」
突然、木の陰からひとりの青年が姿をあらわした。背は尚人たちと同じくらい。整った顔立ちの美しい青年だ。
「藤本鈴音さん、だね？」
「え…あ…」
「はじめまして。システムーΩ(オメガ)の片桐翼(かたぎりつばさ)といいます」
片桐はゆっくりとこちらに近づいてくる。そして、鈴音立ちのそばで止まった。
「敦宏、尚人、ご苦労だった。いつもどおり、あとの処理は僕らが行う」
「じゃあ…やっぱこいつの記憶、消すのか…？」
「言ったろう？それを判断するのは僕らじゃないって」
片桐は鈴音に向き直り、静かに言った。
「君が決めるんだ。鈴音さん」
「え…！！」
「君は知ってはならないことを知ってしまった。本来ならば、即刻抹消処置を施すんだが、いい機会だ、消すか否かの判断は君にゆだねるとしよう」
「私に…」
「抹消処置をしなければ彼らのそばにいられるが、強大な重圧の中で暮らすことになる。記憶を消せば重圧からは逃れられるが、彼らとは２度と話すこともできなくなる」
「…」
「どうする？消すも残すも、君の自由だ」
「私は…」
尚人たちの秘密を背負って暮らしていくのは並大抵の辛さではないかもしれない。あの忌まわしい光景をずっと

引きずっていくのだから。
（でも…）
尚人達と過ごした時間は失いたくない。これからもっと楽しいことがあるかもしれないのに、話すこともできなくなったらそれも全てなくなってしまう。
「私は…」
決めた。もう迷わない。
「私は、思い出をなくしたくない」
短くても、強い意志のこもった一言だった。片桐はそれで全てを察したようだ。
「わかった。抹消処置はしない。そのかわり、どんな代償があるかわからないよ？」
「わかってます。覚悟はできてますから」
「そうか。ならそれでいい。僕はこれで失礼するよ。尚人、敦宏、彼女に感謝するんだね」
片桐は鈴音たちのそばから離れていった。その背中を、鈴音は呆然と見送っていた。
（これでいいんだ）
「リン…」
尚人がいきなり鈴音に抱きついた。突然の出来事に、鈴音は驚きを隠せない。
「な、尚人くん！？」
「ありがとう…」
「え…？」
「ありがとうな…本当に…」
「尚人くん…」
鈴音も尚人を抱き返した。尚人の体が小刻みに震えている。泣いているのだろうか。
「尚人くん。なにかあったら私に言って。こうなった以上、尚人くんのことならなんでも受けとめる。悩みとか

弱音とか全部、私にぶつけていいから」
「リン…」
「ひとりでふさぎこまないで。ね？」
「…ああ…」
鈴音は尚人の頭をなでてやった。普段は明るくて活発な尚人が、今は子供みたいに思えた。
「あ、もちろん宏くんもね！」
急に自分に振られ、敦宏は少し戸惑っている様子を見せたが、そのあと小さく微笑んだ。
「尚人、そろそろ帰るぞ。リンちゃんもいつまでもこうしてるわけにはいかないんだからな」
「…ああ」
尚人は顔を上げ、そのままバイクにまたがってヘルメットをかぶった。照れ隠しのつもりだろうか。
「じゃあリンちゃん、今日はいろいろごめんね」
「ううん、気にしないで。記憶が消えないんだから文句ないわ」
「本当に、ありがとう」
敦宏がふたたび笑った。とてもやわらかい笑顔だ。
「宏！早く行くぞ！」
「はいはい。ったく、世話のやける相棒だ」
「っるせえ…悪かったなっ…」
敦宏もヘルメットをかぶってバイクにまたがった。鈴音に手を振って発進する。
　鈴音はひとりぽつんと残された。でも、気持ちはすがすがしく晴れ渡っている。
「私も、帰ろっかな」
自宅に向かって歩き出す。満天の星空が、すべてを優しく見守っていた。

「ツバサ」
ふいに声をかけられ、片桐…翼は立ちどまった。声のしたほうへ目を向けると、ひとりの女性がバイクに寄りかかって立っている。
「明美か。見てたのか」
「まあね。それより、消さなかったのかい？彼女の記憶」
「ああ、彼女がそう言ったからな。思い出をなくしたくないってさ」
「へえ。あんたにしては珍しいじゃない。いつもなら問答無用で消してるのに」
「彼女は特別だ。あの２人にとって、いい精神安定剤になればと思ってな」
それに、と翼を付け加えた。
「俺も少し、彼女には興味あるんでね」

――――――　終章　――――――

「お疲れさまーーーーっ！！」
年末の一大イベント、中・高等部合同のクリスマスパーティーが無事成功をおさめ、報道部の面々はみな一様に安堵の表情を浮かべている。今は、大地の家での打ち上げの真っ最中だ。
「今年も無事に終わってよかったよ」
「ホント。去年よりスムーズにいったよね」
「スムーズにいきすぎて、新聞のやつらは大変だったけどな」
「まあまあ、それもいいことではないですか」
「ま、そうだけどさ」
陽はコップに入ったコーラを一気に飲み干すと、意気揚揚となるメンバーの中で、ひとりだけ少し浮かない顔をしているのを見つけた。
「リンちゃん、お疲れ」
「あ、瀬戸さん。お疲れさまです」
「どうしたの？元気ないみたいだけど」
「あ、いえ、大丈夫です。少し疲れてるだけなんで…」
「そう？」
やっぱり少しおかしい。単に疲れてるだけではないようなかんじだ。
「リンちゃん、例の事件のこと、どうなった？」
「あ…えっと…」
「ん？」
「あ、何もなかったです。今になっても、全然何もわからないし…」
「そっか。これからどうするんだ？まだ続ける？」
「もうほとんどあきらめてます。これだけやってダメな

ら、無理だろうって」
「そっか。わかった」
陽はそれ以上何も言わなかった。鈴音に何かあったのは確かだろうが、おそらく訊いても何も答えないだろう。
「あ！みなさん！見てください！雪ですよ！」
牡丹がカーテンを開け放つ。空から粉のような雪がぱらぱらと降っていた。
「わー！キレイ！」
「これぞ、本当のホワイトクリスマスってやつか？」
「なに似合わないセリフ言ってんのよ、大地」
「あんだと？失礼なやつめ」
奈央と大地が言い争っている。鈴音もそれを楽しそうにながめていた。
　庭には大きなクリスマスツリーがある。赤や黄色の電球が、それを綺麗に輝かせていた。
（ホワイトクリスマスか…）
尚人もこの雪を見ているだろうか。あの二人はどんなクリスマスを過ごすのだろう。
　クリスマスツリーの光が鈴音に微笑みかけたように思えた。鈴音もそれにこたえてつぶやく。

　“ メリー・クリスマス ”

トップ・シークレット　ＥＮＤ

―――――　あとがき　―――――

　お久しぶりでございます。風雑真人（かざなぎしんと）です。私立赤星学園報道部第２弾「トップ・シークレット」いかがでしたでしょうか。
　まず、祝・７０ページオーバー！おめでとうございます！ありがとうございます！誉めてください！祝ってください！（バカ）
　前回の身近な話題から一転、かなり非日常的な題材になりました。書いてみたいと思っていたわけではないのですが、いままでこういったことに関心がなかったので、それではということで書いてみました。
　テーマは「秘密」ですね。尚人ほど大きなものではないにしろ、人は誰しも他人には言えない秘密をひとつやふたつは持っているもの。かくいう僕自身もそうなのですから、みなさんもそうだと思います。それは、自分が過去に犯した罪であったり、色恋沙汰であったり、人によって様々です。そういったことは、他人が介入してはならないことだと思うと同時に、それによってその人自身が傷ついているのであれば、誰かに打ち明けてしまうのが１番だと思うのです。受けとめてくれる人は必ずいます。尚人にとっての鈴音のように。
　さて今回は、前回ではほんのちょろっとしか出てこなかった鈴音が主人公です。こうして脇役を主人公にしてみるのもなかなか面白いものです。次は奈央かな？でも、奈央って話題がないんですよね。作者自身、つかみにくいキャラクターです。
　気の早い話ですが、第３弾のテーマはすでに決めてあります。ズバリ「卒業」。卒業シーズンを迎えた陽・奈央・大地の３人。さて、報道部生活最後の大波乱とは一

体なにか。書くかどうかはわかりませんし、書いたとしてもかなりあとになると思いますが、興味がありましたらご一読下さったら嬉しいです。

　なお、次回作からはホームページでの公開になります。如月さんの素敵なイラストを載せられるかどうかはわかりませんが、とりあえず努力してみるつもりです。

　末筆になりましたが、刊行に際して素敵なイラストをつけてくださった如月由維さま、きれいなイラストつきの感想をくださった咲香美さま、桐月和葉さま、そして、この本を手にとってくださったすべての皆様に心より感謝いたします。

２００１年　冬

風薙　真人

――――――　お知らせ　――――――

ホームページのご案内
風薙真人ホームページ「ｂｕｇｃｈａｎ　ｐａｇｅ」

風薙真人の趣味ページ。音楽、ゲーム、競馬などコンテンツ多数。
２００２年春　リニューアル予定。乞うご期待！

ＷＥＢ　ＳＩＴＥ　ＵＲＬ
http://www.geocities.co.jp/Athlete-Crete/4766/

ＡＣＣＥＳＳ　ＮＯＷ！！

SPECIAL THANKS

如月　由維
咲　香美
桐月　和葉
nabe D.
しばちゃん
ナスダック

AND YOU

(c) SHINTO KAZANAGI,
YUY KISARAGI
Printed in JAPAN